

年間整備計画の作成による提案力を磨く
整備プログラムの応用が新たな成果を生む

いづみ自動車



メカニックのつなぎを一新し、背中に同社のトレードマークを入れた

東京湾に面した工業地帯の3カ所に工場を展開するいづみ自動車(田村圭社長)。当然ながら、いずれの地域にも運送会社があり、そこで保有するトラックの整備をまとめて請け負うことに取り組んでいる。手がける分野は幅広く、一般整備から車体整備、架装物の製造と整備、電装整備、さらには電子制御系の診断サービスも行う。同社を率いるのは2代目の若手社長。モニタリングやグリーン経営といった考えを用い、顧客に感謝される車両管理を提案している。

地域柄多いタンクローリー
点検から電装整備までこなす

本店のある千葉県市原市の五井地区は、東京湾沿いに石油コンビナートが連なり、そこに入りする運送会社が多く、トラックのメンテナンスを行う整備工場もあちこちにあるが、同社はその最大手。石油元売りの看板を背負ったタンクローリーが

ずらりと並ぶ姿は壮観だ。本店は車検などの一般整備を行う第一工場を中心に、おもに電装整備と特装車整備を受け持つ第二工場、車体整備を担う第三工場の三つからなる。このほか隣り駅の近くに姉崎店(大型車と小型車を合わせて8ライン)があり、神奈川県川崎市の工業地帯に川崎工場(大型車4ライン)を持つ。

車両の整備履歴を管理し
計画的な点検整備を提案

三つの工場による年間車検台数は大型車が1800台、小型商用車と乗用車が600台。入庫台数はさらに多いが、そのうちの大半は大手運送会社との年間整備契約によるもの。運送会社で保有する車両と運行形態を把握し、それに応じた整備プランを作成。年間整備計画費として予算案をまとめて、提案活動を行っている。



本店第3工場では大型車用塗装ブースを備え、キャビン交換なども行う

ング協同組合(田村利光理事長)に加入しており、そのモニタリングサービスの考え方がベースとなった。これを「ITEM(いづみ・トラック・エコノミカル・マネジメント)」として展開。車両の整備履歴を管理し、計画的な点検整備を行うことで、大きな故障を防いで修理にかかる費用も削減している。また、こうした整備プログラムが運送会社のグリーン経営(環境負荷の少ない事業運営)につながることをアピールし、運用の幅を広げ

日本一、スキャンツールを使いこなす大型車整備工場に

年々高度化する車両の電子化に対しては、「かなり前から危機感を抱き、積極的に取り組んできた」(田村圭社長)と話す。全拠点にインターサポートのG-

スキャンを活用しているほか、姉崎店にはデンソーのDST-IIも導入。本店では日立オートパーツ&サービスの「PitCom」に参画し、情報の収集とスタッフの知識向上に活用。昨秋から入庫した車両はすべてスキャンツールでチェックしており、「日本で一番、スキャンツールが使える大型車整備工場になるろう」をスローガンにしている。今年で39歳の田村社長は異業

種から整備業界に入り、会社の運営に携わってきた。それだけに話す言葉のひとつが整理されている。業界の慣習をしっかりと理解した上で、自分なりの解釈を探し続けてきたからだろう。今後を広く見通せば、決して明るい話題は多くない。それでも「お客様に『ありがとう』といわれる商売は生き続けると信じている」と話したのが印象的だった。



近隣の石油コンビナートに出入りするタンクローリーの入庫が多い

動きをキャッチするアンテナを敏感に



いづみ自動車
田村圭社長

「当社の顧客も多い地域なので以前から進出したかったが、なかなか条件が合わなかった。そこにお付き合いの運送会社さんから自社工場だった場所をよい条件で貸していただける話をいただき、進出することができた。いまは人手の確保といった

課題もあり、認証工場としてクイックな整備を中心に行っている。いずれは指定工場にしていきたい」
「今後も拠点拡大などを続けるのか」
「大型車の整備は、電子制御がさらに進むことを考えると、かなり厳しいと考えている。日本でもようやく大型車整備の電子化対応が動き出したが、欧米の動きと比較すると比べものにならない。追いつこうとしても時間がかかるし、その間にも車両の至るところに電子制御がおよび、ますます高度化していく。そうしたときの対応をいくつか

考えておく必要がある。それには周囲の動きをキャッチできるアンテナを敏感にしておくことが欠かせない」
「社長就任は2009年3月だった」
「大学卒業後、スポーツ用品メーカーに就職したのだが、同じ年に創業社長(小泉吉之助氏)の長女と結婚した。実はそうなる前から『考えておけ』といわれていた。営業職として2年ちよつと勤め、1998年に入社した。最初はメカニックから上がってくる作業指示書をもとに請求書を起こしていたのだが、専門用語が分からずに苦労した。悔しかったので、整備専門学校に通

い3級整備士(シャシー)を取得した。こうした経験が何かと生きている」
「事業承継については」
「事業を引き継ぐ前にさまざまな勉強をさせてもらった。とくに中小企業同友会で、まったく別の会社の社長に気づかされたことが大きかった。創業者のパワーと、引き継ぐ者のパワーは内容が違う。互いが理解せずには主張し合っては難しい。後継者はできたものをもらうわけで、ホップ・ステップ・ジャンプのうち、少なくともステップはいらない。やはり継ぐ側が理解を示し、謙虚な姿勢で話し合うのが大切ではないか」